

アソシエーション

私的所有・国家・革命

目次

要旨.....	2
【Ⅰ】 用語解説 他者化と私的所有.....	3
●他者・他者化.....	3
●私的所有.....	4
【Ⅱ】 社会革命としてのアソシエーション.....	9
●いまなぜアソシエーションか.....	9
●アソシエーションとは.....	10
●総括軸は社会革命.....	11
【Ⅲ】 国家・イデオロギー・階級闘争.....	13
●ロシア革命とマルクス主義.....	14
●私的所有という編成原理.....	15
●権力・暴力・イデオロギー.....	16
●〈階級闘争激化で権力奪取へ〉考.....	20
【Ⅳ】 プロ独か 拘束的委任制か.....	21
●独裁への言及.....	21
●プロ独論の変遷.....	22
●レーニンとスターリン.....	23
●近代のダークサイト.....	24
●拘束的委任制.....	25
【Ⅴ】 国家の再吸収.....	26
●国家の解体と政治革命.....	26
参考文献.....	28

要旨

(1) アソシエーションとは〈労働する諸個人が互いに主体的能動的意識的に結びついた協同組織〉。

アソシエーションは、アソシエイトした諸個人が、自ら生産を管理し、生産手段を所有し、協同労働に従事する社会的生産のシステム。

同時に、多種多様な協同組織・地域組織・自治組織などが、重層的に分節しつつ縦横に連合する政治的社会的なシステム。

しかもグローバルな交通と依存によって結合したシステムである。

資本主義にかわる新しい社会はアソシエーションである。

(2) アソシエイトした諸個人が編成主体となって、アソシエーションを組織する。誤解なきように強調すれば、アソシエーションが編成主体になるのではない。**アソシエイトした諸個人の意識性・能動性・社会性**が一切である。

なぜなら、**私的所有**〔→【I】〕によって、労働する諸個人の力が、資本や国家として**他者化**〔→【I】〕し、社会の編成に関する一切が他者任せとなってしまうのに対して、その他者化した力を自身の力として認識し組織し取り戻し、諸個人自身が社会の編成主体となること—これが人間の解放であるからだ。

したがって、アソシエーションは、共同体の復権を唱えるコミュニタリアニズム（共同体主義）¹とは大きく異なる。

かつて**共同体**が社会編成の中心にあり、労働する諸個人は人格としては共同体に依存・埋没していた。資本主義においては、**私的所有**が主体化して社会編成の中心となり、労働する諸個人は人格としては抽象的に自由になったが、社会編成は全面的に物象に依存している。

アソシエーションにおいては、**アソシエイトした諸個人**が、意識的能動的社会的な主体となって社会を編成し、人格的にも真の自由を獲得し全面的に発展する。

(3) アソシエーションは、新たな社会に**移行して初めて**つくり出されるものではない。資本主義の下で、転倒形態で**潜在的**に形成されている社会的生産を、**顕在化**させたものがアソシエーション。そこに至る実践が**社会革命**。革命の総括軸は社会革命にある。

社会革命は、新旧の政治・経済・社会・文化のシステム間の**長期にわたる**競合・抗争・消長による変革過程である。同時に、アソシエーションの萌芽は至る所に存在し、社会革命は様々な社会運動として既に**始まっている**。

¹ リベラリズムやリバタリアニズムが個人を優先するのに対し、歴史的に形成されてきた共同体の伝統の中でこそ個人は人間として完成され、生きていけるとする。共同体主義。マッキンタイア、サンデル、ウォルツァーなどが代表的。【コトバンクより】

(4) 社会革命の前進の中でその結節環として政治革命がある。しかし、**政治革命＝国家の解体**は粉砕や打倒ではない。〈階級闘争激化で権力奪取へ〉論、国家の打倒・粉砕の暴力革命論は原理的に誤りである。それは、国家一般の把握の失敗から生じている。そして国家一般把握の失敗は、〈搾取関係からの単線的把握〉から生じている。

プロレタリア独裁の是非を論じる場合、マルクス、レーニンとともにスターリンを外すべきではない。プロレタリアート独裁の概念は、プロレタリアと冠しているが、近代国家の究極の姿以上のものではなく、止揚されるべき他者。

赤色テロリズムとプロレタリアート独裁の政治思想的背景は同根。法秩序の中立性や普遍性を装うリベラリズムの思想に対して、革命という拘束のない大義に基づいて暴力をもって意志を強制する思想。近代のダークサイトを開示した思想。人間解放の思想ではない。痛苦に確認する必要がある。

国家の解体は、アソシエイトした諸個人という、その力を他者化しない編成主体を産み出す社会運動の力によってのみ可能である。幾多の政権交代、政治制度の再編を経ながら、社会の上部にある国家権力を、社会に従属する機関に**引き下ろし**、その機能を社会に**再吸収**しつつ、その運動の結節環において**コミュニオン**を創出する。それは**他者化としての権力**とは原理的に違う。そのカギは**拘束的委任制**にある。

(5) 以上にたいして、〈でもマルクスは「プロレタリアート独裁」とか、「まず権力を」「暴力革命」とも言っているのでは?〉という反論があるだろう。

本稿のスタンスは、まず、マルクスの方法・原理・体系〔註8〕は有効であり、それをつかんで徹底させることである。その上で、マルクスの言説の振幅にたいして、マルクスの方法・原理・体系に照らして、マルクスにたいしても徹底を要求するということである。マルクスの片言隻句にしがみつく教条主義ではない。

【 I 】 用語解説 他者化と私的所有

本稿の主張のカギをなす「他者化」と「私的所有」という概念について、用語解説という形で、重複を恐れずここで整理・概説しておきたい。

●他者・他者化

用語としてはヘーゲル弁証法用語だが、概念としてはマルクスも継承している。例えば以下。

⑤「人間が自分の『固有の力』を社会的な力として認識し組織し、したがって社会的な力をもはや政治的な力の形で自分から切りはなさないときにはじめて、そのときにはじめて、人間の解放は完成されたことになる」（『ユダヤ人問題』）

①「この活動の生産において人間の類的活動に帰属するすべての属性が、この仲介者（私的所有一引用者）に移譲される。こうして人間は…つまりこの仲介者から切りはなれたものとしては、この仲介者が豊かになればなるほどますます貧しくなる」（『ミル評注』）

⑤〈自分の「固有の力」を自分から切り離す〉、つまり自己の力を他者化する。

①〈人間の類的な属性が、仲介者に移譲される〉、つまり自己の力が他者化される。

他者化とは、自己が否定されて、自己と他者とに分割されること。自己の本質的な要素が疎外され・自立化し・主体化し、自己に対立的に立ち現れたものが他者。他者が抽象的な普遍になり、自己は抽象的な個別に落とされる。他者とは、自己の疎遠な対象化態。

しかし大元を辿れば、自己と他者は、同一の存在。ところが、自己と他者という形で別々に現れているものを観て、それをそのままバラバラに把握して事足りりとするのが悟性的把握。それに対して、別々に現れているが、大元を辿れば存在としては一つ、同一の存在の別々の現れ、と把握するのが概念的把握。

例えば、商品・貨幣・資本といった諸物象、あるいは権力とは、自己の他者化である。それは本来、労働する諸個人という自己の力（意識性・能動性・社会性）が、物象や権力として他者化し、それが対立的に自己を搾取したり抑圧したりしているのだ、と把握することである。

その大元を辿れば、人間の労働という具体的な普遍が座っている。つまり、資本も権力も、自己の他者化であり、一つの存在の他者化した現れ。存在としては一つ。²

他者化した力を、自己の力として認識し組織し取り戻すことが、人間の解放。

●私的所有

①生産手段の所有という規定はスターリン主義のドグマ

私的所有は、マルクスのキー概念だが、スターリン主義によるマルクス理論の破壊によって、決定的に混乱させられてきた。

マルクスが批判する私的所有とは、生産手段の所有問題ではない。

生産手段の所有問題とする規定は、「生産手段を国有化すれば社会主義だ」として「ソ連＝社会主義」の正当化のためにねつ造されたドグマである。

スターリン『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』（1952）で、生産手段の所有形態が全生産関係の基礎であり、他の生産関係は生産手段の所有形態から生じてくるものとし

² 念のために言えば、レヴィナスがいう他者とは全く違う。ないし真逆。レヴィナスの場合、自己（認識主観）にたいして、世界の外部にあって、世界を構成する超越論的主観性が他者。レヴィナス [1906～1995] 現象学者。

て把握される。そして生産手段の社会的・国家的所有が、社会主義の基本的生産関係として絶対的に確認された。これが、ソ連科学院経済学研究所『経済学教科書』（1954）などによって、スターリン主義・反スターリン主義の潮流を横断して全世界に普及した。独占論と並んでマルクスの理論に破壊的に作用した。³

②人間労働が他者化されて私的所有と私的労働に

マルクスは、「国民経済学」（古典派経済学）が私的所有の事実から出発しながら、それ自体を説明しない⁴として、私的所有を批判の出発点に据えた。『経哲』『ミル評注』ではおおよそ次のように規定。

④疎外された労働と私的所有の2つの概念をもって、商品・貨幣・資本などの国民経済学的カテゴリーをすべて解明できる。すなわち、私的所有は、諸カテゴリーのひとつではなく、諸カテゴリーに対して総体的な位置にある。

⑤私的所有は、疎外された労働の必然的帰結。私的所有の主体的な本質は労働。つまり、人間労働という自己が、他者化されて私的所有という他者を生み出すとともに、人間労働という自己は単なる私的労働に落とされる。私的所有は、疎外された労働に対立する他者。

⑥私的所有は、労働と労働の疎外された媒介であり、その媒介によって、人間の類的な属性のすべてが、私的所有に移譲される。私的所有が豊かになればなるほど、労働は単なる私的労働として貧しくなる。

⑦賃労働と資本の矛盾（対立と統一）を規定しているのは私的所有。

⑧疎外された労働が、資本のシステムの底に座り、私的所有の能動性を産み出す本質的矛盾。対して、私的所有は、「私的な社会的なもの」という矛盾を実現することにより、商品・貨幣・流通・資本という諸形態を産出する直接的矛盾。

③共同体の解体から私的所有へ

◇商品生産以前は中心が共同体

人類の発生以来、人間は労働の普遍化を追求し、労働手段・労働対象・生産諸関係を発展させ、また、社会的労働を発展させ、労働主体の能力を形成してきた。

そして人類史の大半は、共同体的生産関係であった。生産共同体の発展の中で、i.人格的な関係（人格の社会的承認、社会的に承認された生産への参加、所有の根源的規定）が形成され、ii.労働の媒介関係（生産諸関係）が進展し、社会的労働を発展させていった。つまり、社会の編成の中心が共同体であり、人格的關係も労働の媒介も、共同体に依存していた。

◇商品交換と私的所有

共同体的生産関係は自己解体し、商品生産関係に移行する。

³ 有井行夫『マルクスはいかに考えたか』p173～参照

⁴ スミス『国富論』「人間の本性上の性向、すなわち、ある物を他の物と取引し、交易し、交換しようという性向…。…この性向はこれ以上は説明できないような、人間性にそなわる本能…。…この問題はわれわれの当面の研究主題にはならない」

商品生産関係は、私的生産であり、共同体的生産の否定として登場する。つまり、i. 人格的な関係と ii. 労働の媒介関係の土台である生産共同体を脱落させている。

ではどうするのか？交換である。

商品生産関係では、労働する諸個人は、生産共同体への依存から人格的に自由になるが、単なる私的諸個人に落とし込まれ、ここでの労働は直接には社会的性格を失った私的労働となる。しかしまた、そういう私的諸労働が、事実は、社会の総労働を形成している。私的諸労働は、社会的分業の自然発生的な諸分枝として相互に依存し合っている。そして、直接的には私的諸労働が社会的労働となるための媒介として、労働生産物の交換が行われる。

その交換は、商品所持者が、まさに互いを商品・貨幣の私的所有者として承認するという関係行為によって成立する。商品生産の特徴は私的生産であり、私的所有者は私的所有者であって、生産過程において、お互いに相対することはない。労働の媒介（生産諸関係）は、非人格的に、すなわち物象⁵的に商品交換として媒介されている。この事態を、生産諸関係の物象化という。

同時に、商品所持者が互いを商品・貨幣の私的所有者として承認する関係行為を通して、人格的な関係（人格の社会的承認）が成立する。商品所持者としての諸個人は、互いに、商品・貨幣という物象の人格として相互承認の関係行為を行うのである。注意したいのは、ここで関係行為するのは物象であり、私的所有者としての人格はその物象を代表するに過ぎないことである。そして、この相互承認の関係行為が、私的所有という法的関係の空間支配を産み出す。それは、脱落した生産共同体の抽象的な形態での創出である。

かくて、共同体的生産から商品生産への移行によって、労働する諸個人の社会的関係は、共同体に依存した関係から、商品・貨幣の交換関係という非人格的な物象的形態に転換される。同時に、そういう社会的生産の編成には無関心に、生産の場面ではなく、流通の場面で、私的所有を発生させるのだった。

◇資本関係と商品関係

注意したいのは、資本主義的生産関係の要は資本・賃労働関係という生産関係であるが、しかし、資本・賃労働関係が、それとして自立的に存立するのではない。私的所有の下で、商品生産関係を基礎にし、商品生産関係によって覆われていることによって成り立つ。言い換えれば、私的生産の内部である工場内で、自由・平等などに全く無関心に搾取を行いつつ、それを商品関係という自由・平等の外皮でもって正当化を行っているということである。

④編成原理としての私的所有

◇労働の力の他者化

⁵ 商品生産関係では、生産における人と人との関係が、物象と物象の関係に転倒される。物象とは、商品、貨幣、資本など。物象とは、単なる物でありながら、根源的な主体である労働する諸個人が単なる私的諸個人として振る舞うことによって、その反対側で、商品、貨幣、資本などとして自立化し主体化したもの。

互いに商品・貨幣の私的所有者として承認し合う関係行為を通して、根源的な主体である労働する諸個人が、単なる私的諸個人という疎外された振る舞いを行い、労働する諸個人をして、社会的なものを自己から徹底的に排除せしめている。もって、労働する諸個人は、労働の意識性・能動性・社会性を不断に他者化し、自己の労働を、他者である資本の労働として実現している。

◇私的所有が社会の編成原理に

こうして、労働する諸個人の力（意識性・能動性・社会性）は、他者の手において、社会的なものに変換される。つまり、私的所有の下では、労働する諸個人の力（意識性・能動性・社会性）が全部、自己に対立的に他者化してしまう。労働する諸個人は、単なる私的諸個人と化し、社会の編成に関する一切を他者任せにするしかない。他者とは私的所有とその分化である商品、貨幣、流通、資本、国家、法則その他。つまり、私的所有によって社会が編成されるのである。

⑤自由な人格の両義性

◇人類史の到達点

商品生産関係では、労働する諸個人は、生産共同体の解体によってそこへの依存から人格的に自由になるが、単なる私的諸個人に落とし込まれた（③）。ここでの自由な人格は両義的であるということだ。

(1)生産共同体から自由だが、生産的実体から抽象化され、物象に依存しているという意味で、その自由は抽象的なものに留まる。

(2)しかしまた、労働する諸個人が、いまだ抽象的だが自由な人格を起点に、意識的自覚的な主体として陶冶⁶されていくという意味でもある。

これが(1)人類史の到達点であり、(2)人間解放への起点である⁷。

この両義的な把握が重要で、〈物象化され切っている〉と把握するならば、外部注入しようが、イデオロギー闘争をしようが、階級闘争を激化させようが、回り道をしようが、人間解放の展望は見いだせないことになる。

◇物象による意志支配

その上で、まず物象による意志支配の面を見る。

互いに商品・貨幣の私的所有者として承認し合う関係行為がカギをなす。

諸個人は、ここでは商品・貨幣という物象の人格化であり、そういう人格が交換のために、互いを商品・貨幣の私的所有者として承認する。つまり、諸個人は相互承認の関係行為を通して、物象の規定性と運動に従属する振る舞いを強いられる。

すなわち、私的所有の下では、相互承認の関係行為を不断に繰り返すことで、諸個人は、

⁶ 陶冶とは、能力や性質を鍛え上げるという意。ヘーゲルの「意識経験の学」からマルクスが吸収した概念。

⁷ 『資本論』①第4章「二重の意味での自由」、『要綱』〈人類史の3段階〉に基づいて人格論が展開される。

その意志で商品・貨幣を支配するのではなく、商品・貨幣という物象が、諸個人の意志を支配する。

⑥ 正当化と私的所有の破れ

◇ 矛盾の露呈と正当化の振動

資本主義的生産関係の要は資本・賃労働関係という生産関係だが、それは、私的所有の下で、商品生産関係を基礎にし、商品生産関係によって覆われている (㊟)。

ここで私的所有が、搾取関係を**正当化**するものとして働いている。

i. 労働する諸個人は、私的所有の下で、自己の労働を、他者としての資本の労働として実現している。しかも、私的所有の下で、私的・法的・抽象的な社会的承認を繰り返して、自由で平等な交換として、社会的正当化のタテマエを了解させられている。

ii. しかしまた、その正当化にも関わらず、社会的・経済的・現実的な社会組織と搾取の実態、他者化の矛盾が繰り返し露呈し、労働する諸個人はそれを認識せざるを得ない。

ここで i. と ii. が無媒介に振動しながら露呈と正当化を繰り返しつつ存立しているのが、商品生産関係によって覆われている資本・賃労働関係という生産関係の世界である。

◇ 破れから私的所有の止揚へ

しかし、私的所有は、自己完結的なものではない。その存立する矛盾であり、破れがある。

資本関係が、搾取を露呈し、商品関係と不断に矛盾すること自体が、私的所有の矛盾であり、破れである。そして、私的所有の下で、転倒形態だが社会的なものが形成されている。大きな破れである。それだけではない。労働する諸個人の人格の自由は、抽象的だが意識的自覚的になりうる自由だった。物象による意志支配には破れがある。

私的所有の下では、たしかに、労働する諸個人の力を全部、労働する諸個人に対立的に他者化してしまう。しかしまた、私的所有の正当化の裏で、他者化の向こう側に、転倒形態であるが、不断に、社会的なもの、共同的な生産実体が形成されていることも紛れもない事実。

そして、私的所有のカギが、互いに商品・貨幣の私的所有者として承認し合う関係行為にあったわけだが、こうして転倒形態で露呈する社会的なものを意識的自覚的につかみに行くことによって、そういう関係行為を媒介しないで、他者化を排して、労働する諸個人の力を直接に発揮して社会を編成する現実性が出てくる。

◇ アソシエイトした諸個人

資本主義以前においては、**共同体**が社会編成の中心であった。

資本主義においては、**私的所有**が主体化して社会の編成原理となった。

それに対する社会編成の主体は、**アソシエイトした諸個人**である。アソシエイトした諸個人の意識性・能動性・社会性が一切である。私的所有の下で、労働する諸個人の力が、資本や国家として他者化し、社会の編成に関する一切が他者任せとなってしまうのに対して、その他者化した力を自身の力として認識し組織し取り戻し、諸個人自身が社会の編成主体となるのである。

【Ⅱ】 社会革命としてのアソシエーション

「その〔共同組合運動の〕偉大な功績は、資本の下への労働者の従属という、現在の窮民化させる専制的システムが、自由で平等な生産者たちのアソシエーションという、共和制的で共済的なシステムによって取って代えられうるということ、実践的に示した点にある」（『中央評議会議員への指示』『全集』⑩）

「資本制的株式諸企業は、協同組合諸工場と同様、資本制的生産様式からアソシエイトな生産様式への移行形態とみなしうる」（『資本論』③）

●いまなぜアソシエーションか

マルクス主義の常識では、資本主義社会にかわる新社会は、「社会主義」「共産主義」だった。しかし実はマルクス自身においては社会主義・共産主義の語を使うのは稀で、むしろ、アソシエーション *Assoziation* だった。それは、マルクスの時代が、協同組合・労働組合・コミュンなどのアソシエーション運動の時代であり、同時代に広く使われていた語だからだ。

ところが、20世紀に入ってアソシエーションという語は消えていく。

理由の一つは、19世紀末から20世紀にかけて、生産力の高度化と国家の強大化・公的社会的機能の拡大が進み、アソシエーション運動が周辺化を余儀なくされたからだ。

理由はそれだけではない。20世紀の運動展開、とりわけロシア革命が、国家集権的かつ急進的に展開された影響である。例えば大月版『マルクス・エンゲルス全集』では *Assoziation* に20もの訳語がバラバラに当てられ、アソシエーションという概念は事実上、抹消されてきた。

21世紀に入って、アソシエーションが再び注目されている。

その理由の一つは、ソ連崩壊を契機にした論争の中で、マルクスの読み直しが提起され、再発見されたからだ。

今一つの理由は、資本主義の新自由主義化・グローバル化・金融化、戦争、災害、分断・対立、環境破壊、生活・生存の破壊などにたいする対抗運動が、アソシエーション運動の萌芽・再興として展開されているからだ。

つまり、〈社会主義・共産主義ではウケが悪い〉から言い換えているのではない。ソ連の総括と情勢の推転の中で、マルクス主義とは違うマルクスの変革理論が提起されているのである。

●アソシエーションとは

〈労働する諸個人が互いに主体的・能動的・意識的に結びついた協同組織〉。〈協同組合的社會〉とも。

アソシエイトした諸個人が、自ら生産を管理し、生産手段を所有し、協同労働に従事する社会的生産のシステム。同時に、多種多様な協同組織・地域組織・自治組織などが、重層的に分節しつつ縦横に連合する政治的社会的なシステム。しかもグローバルに交通し依存するシステム。

〈アソシエイトした〉(assoziert 独 associated 英)とは、同一の目的のために、能動的・自覚的・自発的に、相互に繋がり、連携すること。

◇人間解放

根本には、マルクスの人間の存在把握と人間解放の原理がある⁸。人間諸個人が自由を獲得し、自然と人間の統一、人間と人間の結合を自覚的に回復する社会。

◇生産関係

人類史において、生産関係の歴史的な発展段階は大きく3つ。

第一の段階は、本源的な共同体等を基礎にした**共同体的生産関係**。

第二は、共同体にかわって貨幣が人びとを結びつける**商品生産関係**。資本主義はその最も発展した形態。

⁸ マルクスの方法・原理・体系：『国法論批判』『経哲』でつかまれ、『要綱』『資本論』に貫かれる方法論、疎外論・矛盾論、人間論・労働論、共産主義論こそ、マルクスの理論の方法・原理である。

①人間は、労働によって、一方で、肉体的生存に制約された個別性であると同時に、他方で、全自然を対象にする普遍性であり、〈人間は、個別と普遍の統一である〉ということが出来る。

②ところが、自然に対立的に自立化した人間は、自然との統一に無関心に、自己の抽象的な個別性に固執する。それは、労働する人間を、〈自由に意思する〉という自由な人格として産出すると同時に、その対極において、人間の労働によって対象化された普遍性（社会的意識・社会的自然・社会的連関・社会的生産）を分離し自立化させる。さらに、自立化したものが主体化し、つまり**他者化した普遍性＝私的所有**が、逆に、労働する人間を単なる個別性に引き下ろして、自己に従属させるようになる。私的所有は、商品、貨幣、資本、国家、法則その他として分化・展開する。

②の小括は、〈人間の個別と普遍が対立している〉である。

①は〈統一〉、②は〈対立〉であるが、それがともに人間の存在、すなわち、〈対立と統一との矛盾論的な統一〉＝〈本質的な矛盾〉という存在である。そして、〈本質的な矛盾〉の過程的解決として、根源的には人間諸個人（疎外された労働）が、直接的には私的所有が産出主体となって、資本主義という社会システムを不断に発生させている。これが**第一の結論**。

しかしまた、この〈本質的な矛盾〉の中には①〈統一〉も存在している。つまり、①〈統一〉はまだ顕在化していないが、現在の社会システムの中に潜在している現実性である。①〈統一〉とは新しい社会システム、共産主義ないしアソシエーションである。

そして、②〈対立〉において、資本の矛盾（私的でありながら社会的）の故に、疎外された形態ではあるが、〈社会的なもの〉が産出されると同時に、〈社会的なもの〉が自己のものだと自覚する人格が**陶冶***され、〈社会的なもの〉を**実践し協同する自由な諸個人の運動**が産出されていく。

〈社会的なもの〉が自立化・主体化されるのを第一の疎外とすれば、〈疎外の完成〉をもって、〈私的なもの〉に対して〈社会的なもの〉が対立する第二の疎外が現れる。こうして〈疎外の疎外〉をもって、〈本質的な矛盾〉を止揚し、**共産主義・アソシエーション**が顕在化していく。これが**第二の結論**である。

*陶冶：能力や性質を鍛え上げるという意。ヘーゲルの「意識経験の学」からマルクスが吸収した概念。

そして資本主義の発展のうちに胚胎される新たな生産関係が第三のアソシエーション的生産関係。それは自由な諸個人が自発的・自覚的に形成する生産関係。

◇国家の再吸収

国家の階級支配を解体し、国家が社会から吸収していた公的社会的機能を、アソシエーションのもとに再吸収する。(→【V】)

▼商品生産と正反対

さらにアソシエーションの特徴を何点か。

(1)資本主義において、事実上、生産手段にたいする労働者の社会的占有が生み出されているが、それは少数者による資本主義的私的所有によって覆い隠されている。その潜在的な社会的占有を、資本主義的私所有の廃棄によって顕在化させたのがアソシエーション。その存立の基礎は、アソシエイトした諸個人による共同的所有。所有の主体は社会や国ではない。

(2)アソシエーションでは、労働する諸個人は、生産手段にたいして、社会的にアソシエイトした自由な個人として関わる。労働は、共同の生産手段をもって、自分たちの労働力を意識的に社会的労働力として支出する過程であり、直接に社会的な労働である。

固定的な分業が消滅し、とりわけ肉体労働と精神労働との対立が消滅している。

生産過程は、人間の意識的計画的な制御のもとにおかれる。制御の主体はアソシエイトした諸個人。社会や国家ではない。

労働時間が大幅に短縮され、人間諸個人が個性と能力を全面的に発展させていく。

(3)人間と自然との間の物質代謝が、物象の無政府的な運動による支配をやめて、合理的に規制され共同で統制される。

(4)商品も貨幣もない。一切の階級もない。差別や分断もない。国家も死滅している。

▼資本主義の中に

アソシエーションは、資本の自己否定として、転倒した形態であるが、現に資本主義の中に潜在している。それは、資本が、〈疎外された労働〉の矛盾を基礎にし、〈私的生産としての社会的生産〉という矛盾した存在だからだ〔註8〕。資本は、資本の自己否定として〈社会的なもの〉を産出し、しかしまたそれを否定するという形で振動的に矛盾を拡大していく以外にない。

この把握は重要で、ここから潜在するアソシエーションを顕在化させる実践が社会革命となる。資本主義内の変革にとどまる改良主義との差異も、この把握の有無にある。資本の総体的な把握というマルクスの作業は、潜在するアソシエーションを、実践に先行して理論的につかみ出すものに他ならなかった。

●総括軸は社会革命

アソシエーションを概観した。マルクス主義の常識とも、ソ連の実態とも、一般にイメージされてきた社会主義とも違う。さらに次の2点を強調したい。

(1) 個人か社会か

所有も計画も主体は諸個人だと強調した。マルクスの社会把握の視座は、労働する諸個人を基礎にしている。

「われわれが出発点としてとる前提は、現実的な諸個人、彼の行動、および彼らの物質的生産諸条件」「物質的に生産している諸個人」(『ドイデ』)

〈労働者〉〈労働者階級〉ではないのか。

あらゆる時代に人間社会を支えてきたのは〈労働する諸個人〉。資本主義では、労働する諸個人は〈賃労働者〉という姿をとっている。しかも様々な対立と分断の中にいる。それは労働する諸個人の疎外された姿。にもかかわらず、厳然としてその一人ひとは多様な個性と能力をもった個人。その一人ひとりが現実の社会を日々再生産している。

労働者階級とは、そういう労働する諸個人の集団。

つまり、労働する諸個人の個別性・主体性・矛盾性が社会と歴史を発生させている。そういう人間の存在把握が、労働する諸個人という把握にはある〔註8〕。それを社会や階級といった全体の中に解消して理解してはならないのである。

◇マルクスとエンゲルス

労働する諸個人を基底に置いた社会把握という視座は、〈個人を社会の構成部分と見る〉視座と鋭い対照をなしている。この違いが、マルクスとエンゲルスとの理論的な差異を生んでいる。

例えば〈社会的所有〉を、エンゲルスは〈社会による所有〉、しかも〈国家による所有〉と理解している(『反デューリング論』)。つまり、社会を主体化し、個人をその構成部分と見なしている。この違いは、マルクスとエンゲルスが共同作業を始めた当初からの一貫した違いであった。そして、個人を社会の構成部分と見る視座によってマルクス主義が整理・解説され、スターリン主義の土台となった。

(2) 社会革命

潜在しているアソシエーションを、顕在化させていく実践が社会革命である。

したがって、社会革命は、〈国家権力の転換を画する政治革命があつて、しかる後に始まる〉のではない。資本主義とアソシエーションの新旧の政治・経済・社会・文化のシステム間で、長期にわたる競合・抗争・消長がたたかわれる。革命の総括軸は社会革命にある。社会革命の前進の中でその結節環として政治革命がある。

マルクスは、1848革命段階では、国家集権的で急進的な革命論を構想していた(『宣言』)。しかし、48年革命の教訓とイギリス労働運動の経験、『資本論』をはじめとする経済学批判の深化、アソシエーションの萌芽である国際労働者協会への参加、『共産党宣言』との対照をなす「国際労働者協会創立宣言」(1864年)⁹などの指導文書の執筆を通して、

⁹ 「創立宣言」でマルクスは、①10時間法の制定、②協同組合運動の前進を、イギリス労働者階級の2つの大きな勝利として確認。そして③だから政治権力の獲得が偉大な義務とし、また④国際的な連帯の重要性を強調した。

この「創立宣言」について、エンゲルスは後に、「(結集する諸勢力に受け入れられるように) 幅の広い

48年段階の革命論からの転換が構想されて行く。それは転換というより、初期のマルクスがつかみ取った方法と原理〔註8〕の後期における徹底であり、もってする48年段階の革命論の止揚である。

◇行き詰まりと分解

ところが、エンゲルスは、48年段階の革命論の枠組みを超えることができなかった。

たしかに、最晩年のエンゲルスは、「一陣地から一陣地へ徐々に前進」「1848年にたんなる奇襲によって社会改造に成功することがいかに不可能であったかを決定的に証明」¹⁰と述懐している。これをとらえて、48年段階の国家集権的で急進的な革命論にたいするエンゲルスの自己批判と新たな方向の示唆とする見方があるが、違うだろう。

〈人間解放の原理〉〈資本の矛盾〉〈アソシエーションの潜在〉〈労働する諸個人〉といった核心問題において、マルクスとエンゲルスの差異は歴然。エンゲルスの述懐は、生産力の昂進と労働者の状態の前に革命の展望を見失い、急進主義から漸進主義に転回したという以上ではないだろう。

エンゲルスの転回と軌を一にして次のように路線的な対応が現われた。

ベルンシュタイン：〈マルクス主義は資本主義の現状に対応していない〉として修正・破棄を求める路線。

カウツキー：ベルンシュタインを批判し、エンゲルスの〈陣地戦〉を軸に、エンゲルスの整理・解説を墨守する路線。

レーニン：カウツキーを批判し、エンゲルスの整理・解説に依拠しつつ、国家集権的で急進的な革命論を強く継承する路線。

かくてマルクス主義は三分解したわけだが、本稿の行論から明らかなように、いずれの路線も、エンゲルスの行き詰まりを乗り越え、マルクスがつかみ取った理論を継承するものではなかった。

【Ⅲ】 国家・イデオロギー・階級闘争

〈権力はどうするのか?〉という問いがある。それを念頭に論を進めたい。

綱領」にしたため、『共産党宣言』の原則を貫徹できなかったと否定的に評価している（『共産党宣言』1888年英語版序文）。また、レーニンの指導下で書かれたリャザノフの『マルクス・エンゲルス傳』（1923）も、このエンゲルスの評価に依拠して、「（イギリスの労働運動も、インターナショナルの運動も）階級意識の発達に関する限りでは、それは1848年の革命的前衛には遥かに遅れていた」「後退」「大衆および指導者達の無産階級意識の低い水準」と見ている。〈搾取関係からの単線の把握〉を特徴とするマルクス主義の視角（【Ⅲ】）からすると、イギリス労働運動もインターナショナルも「後退」に見えてしまう。マルクスが経済学批判の作業やイギリス労働運動の教訓から模索した革命論の刷新とは対照的に、エンゲルスやレーニンらの描く革命論がここに浮き彫りになる。なお③については【Ⅲ】で扱う。

¹⁰ 『フランスにおける階級闘争』への序文（1895年）

●ロシア革命とマルクス主義

〈権力の力で資本主義を廃絶する〉。要約すればこれがロシア革命のコンセプトだろう。

たしかに生産手段の国有化で資本家は一掃した。しかし商品貨幣関係はなくせなかった。小商品生産者らに対する残酷な絶滅戦を強行したが無理だった。この無理がスターリン主義発生の一つの原因。結果は深刻だった。

▼マルクス主義の欠陥

これはマルクス主義の基本路線通りだった。そこに問題があった。

マルクスの理論を、エンゲルスら後継者たちが整理解説したものがマルクス主義。その理解の中心は、〈搾取関係の把握から階級対立へ、階級闘争激化で権力奪取へ〉である。

端的に言えば、i. 搾取関係からの単線的把握。そこからする、ii. 矛盾の総体的把握の欠如、iii. 客体と主体の乖離、iv. 客体にも主体にも無媒介な主意主義的変革実践。

マルクス主義の欠陥をごく簡潔に4点あげたが、おそらくマルクス主義の抱える構造的欠陥の核心に関わるだろう。本稿の全体がこの4点に対する批判と対論として読んでいただきたい。その上で結論的に。

i. マルクス主義は、エンゲルスの理解がそうであるように、剰余価値の発見＝搾取関係の把握の一辺倒で資本主義をつかもうとする。

ii. 〈商品関係と資本関係〉〈賃労働と資本〉〈私的生産としての社会的生産〉という矛盾の総体的な把握がない。

iii. 資本や国家といった客体について、労働する諸個人という主体の他者化¹¹であるという存在¹²の把握を欠如させ、自立し自己完結した単なる客観的な構造として把握される。

主体もまた、労働する諸個人とその他者化という存在から切り離された、単なる受動的な主観。

iv. したがって、ここで存在に即した変革の可能性は否定されている。そして、存在から切り離された、主意主義＝主観主義的な変革実践が無媒介に主張される。そして階級的立場や階級対立の暴露が問題にされ、『資本論』に階級対立激化論や崩壊論を読み込むということになる。¹³

なお、マルクス主義＝スターリン主義ではないが、マルクス主義の理論的な欠陥の土台の上に、それを実践的に貫徹するとスターリン主義が発生する。〈搾取関係の把握から階級対立へ、階級闘争激化で権力奪取へ〉と〈権力の力で資本主義を廃絶する〉とプロレタリアート独裁とはそういう内的な連続性を持っている。

¹¹ 他者化 →【I】

¹² 存在とは、主体と客体とを一その認識主観も含めて一〈1つの本質〉として把握したもの。マルクスの唯物論。

¹³ 長谷川義和「マルクスにおける人格の陶冶論」（有井『現代認識とヘーゲル＝マルクス』所収）を参照

◇レーニン

マルクス主義を正統的に継承した。搾取関係の単線的把握の上に、階級対立から国家を導出、国家の暴力性と革命の権力問題を強調した。

◇グラムシ¹⁴、アルチュセール¹⁵、プーランザス¹⁶

敗北の教訓から問題を提起した。相違を捨象すれば、暴力性・権力問題に対して、イデオロギー性を強調した。それは、マルクス主義の問題点の指摘としては重要だが、欠陥を超えるものはなかった。

●私的所有という編成原理

マルクスの把握を結論だけ示せば以下。

- ・商品関係（交換）と資本関係（搾取）は二重。矛盾しながら転回¹⁷している。
- ・その大元に私的所有という編成原理が座っている。私的所有から社会システムが発生¹⁸している。
- ・私的所有の社会システムの矛盾は、〈商品関係と資本関係〉〈賃労働と資本〉〈私的生産としての社会的生産〉の総体。
- ・資本の生産は、資本の自己否定として、転倒形態で社会的生産を形成している。
- ・労働する諸個人は、抽象的だが自由な人格¹⁹を起点に、意識的自覚的な主体として陶冶²⁰されていく。
- ・理解のカギは私的所有。

▼私的所有

マルクスが批判する私的所有とは、生産手段の所有問題ではない。（生産手段の所有論的

14 [1891～1937] イタリアの革命家。1921年イタリア共産党創立に参加。1926年ファシスト政府の弾圧による10年の獄中生活の間、支配における「ヘゲモニー」や「同意」の問題について考察。

15 [1918～1990] フランスの哲学者、共産黨員。従来のマルクス主義の「土台上部構造」一元論・「経済決定」論に異議を唱え、国家、イデオロギーの自立性を主張。1967年ごろより、理論における階級闘争の視座を前面に押し出す。フランス共産党内部から、同党のプロ独概念の放棄などを批判。

16 [1936～1979] ギリシャ生まれフランスで活躍した政治学者、ギリシャ共産黨員。1970年代の国家論の論争における中心人物の一人。従来のマルクス主義の「土台上部構造」一元論・「経済決定」論・「国家＝道具」説にたいして、国家の自立性、ヘゲモニーの主導性を主張。

17 転回とは、矛盾する二項が、相互に反発し合いながら、場面転換を繰り返している様。マルクスの弁証法概念の一つ。

18 本稿で主に使う発生とは、例えば、〈封建制の中で商品生産が発生した〉という場合の〈発生〉とは意味が違う。『資本論』①の商品→貨幣→資本のような展開を、マルクスは〈発生的叙述〉（『剰余価値学説史』）といったが、これは時間的経過を追っているのではもちろんない。では論理の発展過程か。それも一面的。労働の矛盾を基礎にした商品→貨幣→資本の展開が、現実と共に同時に不断に繰り返されていることを言っている。歴史的発生でもなく、論理的発生でもなく、システムの発生という。いわゆる「論理と歴史」問題にたいする対論。

19 『資本論』①第4章「二重の意味での自由」、『要綱』〈人類史の3段階〉に基づいて人格論が展開される。

20 陶冶とは、能力や性質を鍛え上げるという意。ヘーゲルの「意識経験の学」からマルクスが吸収した概念。

な規定は「ソ連＝社会主義」の正当化のためにねつ造されたドグマ²¹⁾。**私的所有**とは、交換過程において、商品所持者同士が、商品・貨幣の私的所有者として相互承認する意志関係、そこから発展する法的関係である。

社会システムは、根源的にはすべて労働から発生している。しかし労働の力は、疎外されて**私的所有**の力に転換している。**私的所有**は、労働に対立して他者化²²⁾したもの。私的諸個人から疎外された社会的な力の発現点。だから、労働の他者化である私的所有によって社会の総体性²³⁾をつかみ、その止揚を展望できる。

私的所有はシステムとして分化・展開する。(1)運動主体としての商品、(2)その反対の単なる私的労働、(3)抽象的に自由な人格、(4)労働を措定した資本、(5)法的抽象的な共同体としての国家、(6)転倒形態での社会的生産、(7)意識性社会性の転倒形態である社会法則など。

▼自己矛盾的展開

資本関係が搾取を露呈しつつ、自由・平等な交換である商品関係に不断に転回して正当化する。私的所有は存立する矛盾である。しかしまた、資本関係が搾取を露呈し商品関係と矛盾することは、私的所有の破れなのだ。

①この矛盾が、搾取や貧困として現象し、労働する諸個人の自由な人格を否定、矛盾が意識化される。

②他方で、資本の生産は、資本の自己否定として社会的なものを露呈する。

こうして、資本の社会システムの自己矛盾的展開を通して、①自由な人格が否定を通して陶冶され、②社会的生産が転倒形態で形成される。

『資本論』が詳論する工場法制定は、一面では資本の矛盾の弥縫的な解決だが、転倒形態での社会的生産の形成をとらえて、労働者の側から、規制という形で社会的につかんだものでもある。

◇アソシエイトした諸個人

労働する諸個人が、現れ出た社会的なものを意識的自覚的につかむ運動が**社会運動**。転倒した形で潜在するアソシエーションを、意識的自覚的に顕在化させるのが**社会革命**。私的所有にかわる編成主体は、一切の他者化を排した〈**アソシエイトした諸個人**〉。

●権力・暴力・イデオロギー

▼「非和解性の産物」論

国家は自立的に発生しない。「階級対立の非和解性の産物」でもない。

21 →【I】

22 →【I】

23 総体性とは、現在の自己が、それ自身としてその外部の何ものにも依存しないで存立すること。だから〈労働を措定した資本はそれ自身として総体性となる〉といえる。しかしまた現在の自己の総体性は、それ自身が対立と統一の矛盾論的な統一であるがゆえに有限であり、自己否定をもって、高次の総体性を産出する。有限性の弁証法。ヘーゲル・マルクスの概念。

たしかに、エンゲルスは、『起源』で「国家は…氏族社会そのものの内部に発展する階級対立のなかから発生する」「(国家は) 資本が賃労働を搾取するための道具」と論じ、それに依拠して、レーニンは、『国家と革命』で「階級対立の非和解性の産物」「武装した人間の特殊な部隊」と論じた。これがマルクス主義の国家論の基本。

まず、エンゲルスの『起源』には方法的に大きな錯誤があった。エンゲルスは、眼前の近代国家を対象化するのではなく、古代史研究から国家一般へと無媒介に飛躍した。それをまた無媒介に〈搾取関係からの単線的把握〉に接合した。労働の矛盾から私的所有、私的所有から社会システムへと把握するマルクスの方法とは全く違うものだった。そしてエンゲルスの国家論は、近代国家を対象化しないという点で非実践的だ。

次に、階級対立を「非和解性」としてだけ把握するのは、賃労働と資本の矛盾の把握として極めて一面的。賃労働と資本の矛盾とは、賃労働＝〈生きた労働〉、資本＝〈蓄積された労働〉の矛盾、つまり労働の自己矛盾。矛盾とは、対立であると同時に統一である。統一がなく、対立がただ非和解にあるのだとすれば、そもそも矛盾にならない。互いに弾け飛ぶだけである。そうではなく互い他を前提とする関係だからこそ、対立と統一として矛盾となる。

レーニンは、ヘーゲルの哲学ノートを作成し、「弁証法は簡単に対立物の統一の学説」と書き込んだが、その理解は、同時期に書かれた『カール・マルクス』に反映された形跡はあまりない。

▼交換過程

では国家はどこから？ 国家の原基は、交換過程（『資本論』①第2章）にある²⁴。

かつて共同体生産では、i.労働の媒介、ii.人格の相互承認を**共同体**が担った。

共同体を解体した商品生産では、共同体にかわって**私的所有**が社会の編成原理となる。

私的所有の下では、i.労働の媒介が商品交換という回り道で行われ、ii.人格の相互承認は、交換過程において私的所有者としての相互承認として行われる。（→【I】）

ii.の人格の相互承認の意志関係が、法的抽象的な共同体を創出する。これが国家の原基である。

▼ブルジョア社会の公的総括

ブルジョア社会を〈私的〉に総括するのが市民社会。〈公的〉に総括するのが国家。ブルジョア社会という1つの本質の2つの極²⁵。〈ブルジョア社会／市民社会〉の区別に注意。

イメージ的に言えば、ブルジョア社会という楕円があって、その2つの焦点として〈私的〉な総括点と〈公的〉な総括点がある。ブルジョア社会は、市民社会も国家も含む概念。市民社会は経済、国家は政治という風にも単純化できない。私的か公的かの総括の仕方の違いで、

²⁴ 国家の原基を交換過程に見る見解は、パシュカーニス（1891～1937 ソ連の法学者）『法の一般理論とマルクス主義』（1924／邦訳 1958）による。パシュカーニスはスターリン主義の下で 1937 年に粛清。有井行夫『株式会社の正当性と所有理論』が復権・継承。

²⁵ 矛盾や対立の中にある2つの事柄は、一見、無関係で別々の事柄のように見えるが、実は、〈1つの本質〉が、〈個別〉と〈普遍〉という2つの契機に分化し相互反発しながら展開しているもの。つまり、2つの事柄はそれぞれ自立化しているが、〈ひとつの本質〉の両極。ヘーゲル・マルクスの弁証法の核心。

市民社会と国家は相互に矛盾しつつ浸透もしている²⁶。

国家は〈社会的なもの〉の否定としての〈公的なもの〉。〈社会的／公的〉の区別に注意。

私的所有の編成原理は、一方で、市民社会から徹底的に社会的なものを排除し、他方で、排除した社会的なものを国家に吸収させ、公的なものとして発現させる²⁷。もって私的所有というブルジョア社会の秩序を護持する。

だから国家は「私的所有の制度」（『国法論批判』）、「ブルジョア社会の公的総括」（『経済学批判』序説）。²⁸

◇公的な暴力

私的なものは社会的なものに反発する。社会的なものを徹底的に排除する私的所有の秩序が公的な暴力の淵源。階級意志の有無ではなく、社会的なものを弾く秩序が暴力なのだ。

²⁹

◇権力

たしかに、国家は強大で抑圧的、しかもそれ自身が意志をもつようだ。しかし、国家の力は、実は、諸個人の力（意識性能動性社会性）が他者化して発現するもの（『ユダヤ人問題』【IV】で引用）。

社会形成の主体は労働する諸個人だが、私的所有の下では、諸個人の力は私的でバラバラ。国家は、バラバラな私的な力を吸収し、公的な力に変換する。その変換装置が例えば天皇やヒットラー、安倍、トランプ、あるいは政党も。単に資本家の意を呈しているだけではない。他者化した諸個人の力をして、諸個人を抑圧する。その転倒の核心に私的所有がある。

◇イデオロギー

マルクスのイデオロギー論は物象化・物神性論である。

私的所有の下では、生産における人と人の関係が、物象と物象の関係に転倒され（人格の物象化）、さらに、諸個人は諸物象の人格になる（物象の人格化）。この二重の隠蔽の下で「自由、平等、所有、そしてベンサム³⁰」（『資本論』）のイデオロギーが発生する。つまり、〈資

²⁶ なお、いわゆる土台・上部構造の図式の図式主義的な理解の難点は、このブルジョア社会という1つの本質があって、市民社会と国家が総括の2つの現れという把握を理解していない点。

²⁷ 〈私的—社会的—公的〉という3項による把握は、ヘーゲル・マルクスの〈推論〉という方法。なお〈私的—社会的—公的〉での国家の把握は本稿のオリジナル。

²⁸ もちろん国家論には、暴力装置、政党装置、イデオロギー装置、議会制度、教育制度、経済政策、公共政策、対外政策、さらにグローバル化の中での変容などのテーマがある。しかし本稿はまず国家一般の把握に注力した。①社会の根源的な発生源は労働、直接的な発生源は私的所有。②国家の原基は交換過程における法的関係、③国家の本質は〈社会的なもの〉の否定としての公的なもの、「私的所有の制度」「ブルジョア社会の公的総括」、④その本質の表現として、(1)公的な暴力、(2)権力、(3)イデオロギー、(4)公共機能、(5)階級性—と展開した。マルクスは、資本論＝経済学批判と並んで国家論＝政治学批判を構想しつつも、果たせなかったが、マルクスの方法・原理・体系〔註8〕に踏まえれば、本稿の主張する展開になるのではないかと考える。

²⁹ 治安維持法の第一条にその目的として、「国体」「私有財産制度」の護持と明記されている。（この私有財産制度とマルクスのいう私的所有とはやや位相が違うがそれはおくとして）天皇制の暴力とイデオロギーの問題も、〈社会的なものを徹底的に排除する私的所有の秩序が公的な暴力の淵源〉という観点で国家一般を土台にして把握する必要がある。

³⁰ ベンサム [1748～1832] イギリスの哲学者・経済学者・法学者。功利主義の主唱者。功利主義の理念

本家も労働者も誰もが、自由で平等な私的所有者。誰もが私的利害を徹底に追求すればいい。それが予定調和的に公の利益になる」という自由主義思想である。

付け加えれば、公のイデオロギーがある。排除された社会的なものを公的なものとして吸収する。公のイデオロギーも国家から生まれるのではない。私的所有による排除から発生する。

◇公共機能

社会的に必要な機能を吸収し公共の機能にする。支配と機能の両面がある。

◇階級性

政治的国家と階級国家の関係は、商品関係と資本関係の転回と同じで、不断に転回している。階級国家は、政治的国家の法的抽象的なあり方を廃棄しない。政治的国家が無媒介に階級的なのだ。

▼上述のイデオロギー強調の難点

マルクスは、イデオロギーを、私的所有という発現点をつかんで批判した。

それに対して、上述（アルチュセールなど）のイデオロギー強調は、イデオロギーを自立的なものとしている。把握が搾取関係一元論で、私的所有という編成原理の把握が欠落しているからだ。さらに、イデオロギー支配の強調に自縛されている。物象化を自己完結的なものとするから。私的所有の破れが重要なのだ。

誤解なきように付言すれば、イデオロギー強調が無意味だとか、国家の本質はイデオロギーよりも暴力だとかと言っているのではない。

エンゲルスは、イデオロギーについて単なる「偽りの意識」（『全集』第39巻 p86）と把握し、〈正しい認識〉を対置すれば泡沫のように消えるものと考えていた。経済決定論的な見地からすればイデオロギーなど大した問題ではなかった。そういう意味で、マルクス主義のイデオロギー軽視にたいする問題提起は重要であった。

そしてイデオロギー強調の問題意識は、支配は単に暴力的な抑圧によって成り立っているのではなく、同意やヘゲモニーといった自発的な隷属という側面を解明する必要があるということ。これも重要だ。

しかしやはりポイントは、i. 搾取関係に対する商品関係であり、ii. 人格の物象化と物象の人格化であり、iii. しかし物象化は自己完結的なものではなく、破れがある、という把握だろう。

イデオロギーの強調にせよ、暴力の強調にせよ、イデオロギーなり暴力なりの発生源と支配力の発現構造を把握しないで、その現われだけを追求・強調すると、それは支配の強大さだけを大寫にし、それに自縛されることになる。

レーニンのいわゆる外部注入論³¹も、i. ~ iii. の把握の欠如のために逢着したものである。

は、19世紀前半、インドにおけるイギリス東インド会社の勢力圏で用いられた行政法体系にも大きな影響【コトバンクより】／マルクスは、「ベンサム！」の一言で、〈私的利害の徹底追求と予定調和的な公の利益〉を説明。

³¹ 『何をなすべきか？』（1902）。労働者の自然成長的な経済闘争はそれ自体としてはブルジョア・イデオロギー

そこに無媒介に階級闘争や政治闘争を強調してもそれは破産的である。

なおアルチュセールは階級対立の把握が根本的に間違っている。賃労と資本が、互い他を前提にする矛盾であることがつかまれていない。これも上で見たエンゲルス、レーニンを引き継ぐ誤りであるが。

● 〈階級闘争激化で権力奪取へ〉考

▼階級闘争

階級対立とは賃労働と資本の矛盾。賃労働は〈生きた労働〉、資本とは〈蓄積された労働〉。つまり労働の自己矛盾〔上述〕。だからこの矛盾を突き詰めてもその次元では止揚されない。階級闘争激化論の無理性である。

私的所有という編成原理の次元で、矛盾を総体として把握することだ。

私的所有とは、労働する諸個人の力（意識性・能動性・社会性）を全部、自己に対立的に他者化してしまったということ。労働する諸個人は単なる私的諸個人と化し、社会の編成に関する一切を他者任せにするしかない。他者とは商品、貨幣、資本、国家、法則その他。完成した転倒だから他者任せを簡単には廃絶できない。

しかし、変革の確かな展望も存在する。人格の自由とは抽象的だが意識的自覚的になりうる自由。そして、私的所有の下で、転倒形態だが社会的なものが形成されている。それを意識的自覚的につかみに行けるかどうか。それは「並外れた意識」（『要綱』）だ。

だから、社会的なものをめぐる攻防・消長の長い過程の中で、意識的自覚的な諸個人が、上からでもなく、法則に委ねるのでもなく、アソシエイトしていく。こうして私的所有にかわってアソシエイトした諸個人が社会の編成原理として成長し、他者任せを廃絶する。

▼権力問題

権力とは自己の他者化である。（この把握がアナキズムとの区別である³²）。プロレタリア

オロギーを超えないとして、社会主義を目指す政治闘争を外部から持ち込む必要を主張した。

³² マルクスとバクレーニンの対立がインターナショナルの分裂・破壊をもたらした。その対立点は以下。マルクス：「労働者は…政治権力をにぎらなければならない」「暴力がわれわれの革命のてこにならざるをえない」（「ハーグ大会についての演説」1872 『全集』⑧）

バクレーニン：「（マルクスは）無政府あるいは自由は、目的であって、国家、あるいは独裁は手段だというのだ。結局、人民大衆を解放するために、彼らを奴隷化しなければならないというわけだ。われわれの論争はこの矛盾を根拠にしている。…われわれはこう回答する。いかなる独裁も『自己を永久化する』ほかに他の目的をもつことはできないし、独裁は『それに耐えている人民のなかに、奴隷制しか生み出し、育てることしかできない…』」（『国家制度とアナキー』『著作集』⑥）

この対立の論点は、本稿がテーマにしている問題そのものである。

マルクスは、バクレーニンの著作のノート（『バクレーニン・ノート』）を作成しているが、マルクスの反論は「空文句」という以上の内容を残していない。

マルクスの主張の「矛盾」を突いている点で、バクレーニンの批判は正鵠を射ている。

しかしまた、バクレーニンの国家観は、マルクスをもって批判できる。『ユダヤ人問題』（〔IV〕⑧）のマルクスの権力概念、権力とは、私的所有の下で、労働する諸個人の力（意識性能動性社会性）が他者化し、それが労働する諸個人を抑圧している、という存在把握である。バクレーニンの主張は、この点が欠如し、自立的なものとして把握された権力を、ただ拒否しているだけなのだ。そして、主体についても、労働する諸個人とその他者化という存在把握から切り離されており、そういう主体の自由を抽象的に強調し

権力とプロレタリアを冠しても他者である。〈権力を取る〉とは、他者化することなのだ。既成の権力を取るのはもちろんだが、それを壊しても同じだ。

権力の力で社会を作りかえるという発想は自家撞着である。他者化した力で他者化の原因を廃止できない。アソシエイトした諸個人にしかできない。

政治革命＝国家の解体は粉砕や打倒ではない。〈階級闘争激化で権力奪取へ〉論、国家の打倒・粉砕の暴力革命論は原理的に誤りである。それは、国家一般の把握の失敗から生じている。そして国家一般把握の失敗は、〈搾取関係からの単線的把握〉から生じている。

つまり、私的所有の下では、労働する諸個人の力（意識性・能動性・社会性）が他者化し、その他者として資本や国家を把握する—というのがマルクスの方法だと本稿は主張しているが、階級闘争激化で権力奪取へ論、国家の打倒・粉砕の暴力革命論は、それとは決定的に違う方法に基づいた政治理論。この方法の問題に立ち返って総括していないと、さしあたり運動中心の展開をしても、形を変えて繰り返し誤りが発生する。

国家の解体は、アソシエイトした諸個人という、その力を他者化しない編成主体を産み出す社会運動の力によってのみ可能である。幾多の政権交代、政治制度の再編を経ながら、社会の上部にある国家権力を、社会に従属する機関に引き下ろし、その機能を社会に再吸収しつつ、その運動の結節環においてコミュニオンを創出する。それは他者化としての権力とは原理的に違う。そのカギは拘束的委任制にある。

【Ⅳ】 プロ独か 拘束的委任制か

●独裁への言及

プロレタリアート独裁（プロ独）および独裁について、マルクス、レーニン他が内容的に言及したのを見てみよう。〔下線は引用者〕

◇エンゲルス

④「革命的な臨時秩序の本質は、まさに権力の分立が臨時的に廃止されている点にある、立法権力機関が執行権力を、あるいは執行権力機関が立法権力を、一時的に自分の手に奪取する点にある」（1848）³³

◇マルクス

⑤「すべての革命のあとに続く臨時的な国家秩序は、独裁を、しかも精力的な独裁を必要とする」「すべて未構成の秩序のもとでは、あれこれの原理ではなくて、もっぱら salut public

ているだけなのだ。

本稿は、マルクスが「権力」「暴力革命」と言っているから無条件にそれが正しいとは見ない。マルクスの方法・原理・体系に照らして、是非を吟味し、その徹底を求めるというスタンスである。

³³ ⑥「7月4日の協定議会の会議」『全集』⑤

公安ということだけが基準になる」(1848)³⁴

◇エンゲルス

◎「革命は、住民の一部が他の部分にたいして、銃や銃剣や大砲を手段として…自分の意志を押しつける行為である。そして、勝利した党派が自己の闘争をむだに終わらせたくないならば、彼らは、その武器が反動家達に引き起こす恐怖によってこの支配を維持しなければならない」(1872)³⁵

◇レーニン

①「独裁という科学的概念は、なにものにも制限されない、どんな法律によっても、絶対にどんな規則によっても束縛されない、直接暴力に依拠する権力以外のなにものも意味しない」(1906)³⁶

②「独裁の欠くことのできない標識、独裁の必須の条件は、階級としての搾取者を暴力的に抑圧すること」(1918)³⁷

③「ブルジョア国家の形態は多種多様であるが、その本質は一つである。これらの国家はみな、形態はどうあろうとも、結局のところ、かならずブルジョアジーの独裁なのである。資本主義から共産主義への移行は、もちろん、きわめて多種多様な政治形態をもたらさざるをえないが、しかしそのさい、本質は不可避的にただ一つ、プロレタリアートの独裁であろう」(1918)³⁸

◇スターリン

④「レーニンはこう言っている、…『小規模生産は…資本主義とブルジョアジーとをたえず…大量にうみだしている…』『階級を絶滅することは、地主や資本家を駆逐することだけではない…、小商品生産者を絶滅することを意味する…』³⁹…だから、プロレタリアートの独裁…は、…ほんの瞬間的な時期とみるべきではなく…歴史上の一個の時代と見なければならない」(1924)⁴⁰

●プロ独論の変遷

④⑤臨時性と全権掌握

マルクス・エンゲルスが、1848年3月ドイツ革命を評論して独裁に言及している。ただし、この独裁はブルジョア独裁。

特徴は、フランス革命史研究に踏まえ、独裁の臨時性、全権力の特定機関による掌握、法

³⁴ ④「危機と反革命」『全集』⑤

³⁵ ③「権威について」『全集』⑱

³⁶ ①『カデットの勝利と労働者党の任務』『全集』⑩

³⁷ ②『背教者カウツキー』『全集』⑳

³⁸ ③レーニン『国家と革命』第2版・第2章第3節

³⁹ 「共産主義内の左翼空論主義」『全集』㉑

⁴⁰ ④「レーニン主義の基礎について」『スターリン全集』⑥

律の停止一を標識とする、ジャコバン独裁らしいの独裁概念を踏襲している点。

◎主体は党派・恐怖で支配

エンゲルスがパリ・コミューンの総括の中で独裁に言及、コミューン戦士の不徹底を論難したもの。

特徴は、独裁の主体は「勝利した党派」、独裁の内容は「反動家を武器の恐怖で支配する」という点。マルクスと同じで臨時的。

①何物にも束縛されない暴力

1903年、ロシア社会民主労働党が、プレハーノフ起草の綱領でプロ独を掲げときは、実はレーニンは批判的な意見を述べていたが、1905年の蜂起敗北後、レーニンもプロ独の概念を提示。

特徴は、「独裁はいつさいの法律・規則に拘束されない」と規定した点。

②必須条件は暴力的抑圧

干渉戦・内戦とカウツキーなどとの論争の渦中で示された実践してのプロ独。ここでレーニンは、以前の超法律・超規範という規定の上に、プロ独の暴力的抑圧の契機を強調した。それは、拘束のない赤色テロリズムの発動であった。

③独裁があらゆる国家の本質

②と同時期、レーニンは独裁論で踏み込みを行う。

マルクスもエンゲルスも、独裁を臨時的と限定していたが、レーニンは、ここで限定を取り払い、すべての国家に貫通する本質として独裁を一般化した。独裁の一般規定はレーニンに始まる。

④小商品生産者を絶滅する時代

レーニン独裁概念を復唱しながら、それを物質化に努めたのがスターリン。

商品関係が厳然と支配する社会にあつて、それを権力の力で絶滅していく政策の要がプロ独。そしてその期間は「時代」という長さで続くと言明。

●レーニンとスターリン

▼マルクス

マルクスの（エンゲルスも）独裁は基本的に臨時的な措置だった。

マルクスが独裁の内容を語ったのはブルジョア独裁についてだけ。プロ独の内容は全く語っていない。そもそも、マルクスがプロ独という用語を使ったのは、全著作中（演説・共同声明も含む）わずかに7回。しかもいずれもごく簡単な言説。

マルクスの独裁概念は、ブルジョア独裁の概念をプロ独に横滑りさせたという怨みが強い。マルクスにとってプロ独はキー概念とはいえない。

▼マルクス主義の欠陥

独裁概念が大きな意味を持つのはレーニン以降、とりわけロシア革命以降。

レーニンの⑩「法律にも規則にも束縛されない直接暴力に依拠する権力」は画期をなす。超法規・超規範の規定は、権力の本質を言い当てていると言えるが、思想問題も凝縮している（次節）。

とはいえ、⑩の時点は実践以前の理論上の論議だが、⑩⑪⑫は実践の最中で打ち出されたものとして重みが違う。そこには〈権力の方で資本主義を廃絶する〉というロシア革命の基本路線があり、小商品生産者に対する残酷な絶滅戦の強行がある。スターリン主義の発生源の一つ。そしてマルクス主義の基本路線の欠陥が実践的に逢着した地点である。

独裁概念について、マルクスのわずかな言説をもって説明するのは無理がある。実践の中で打ち出されたレーニン・スターリンの規定を中心にすべきだ。

さらに、スターリンだけを切り離して議論するのも恣意的で不当だ。マルクス主義の基本路線を忠実に実践し物質化し、プロ独の実際を体現したスターリンを外しては論じられない⁴¹。

●近代のダークサイト

▼超法規・超規範

たしかに、革命権力は、旧来の法律をうち破ったが、新しい法律をまだ制定していない状態の権力、憲法制定権力。法律がないのだから超法規的。

しかし、超規範なのか。革命権力は、変革と建設の要求・規範・目標・政策に厳しく縛られるはずだ。だから、レーニンも「(プロ独は) 下からの人民大衆の直接の発意に、直接に基礎をおく」といった一句を入れたりするが、全く実質がなく拘束のない理念的確認。

▼シュミットとレーニン

権力の本質を、このように超規範、ないし規範自体を決める存在だ、と論じた者がいた。C.シュミット⁴²は、「例外状態」「主権独裁」などを論じ、法秩序の中立性や普遍性を装うリベラリズムの思想に対して、その仮面を引きはがし、その背後にある価値的な判断を引きずり出した。

行論との関係で敷衍すれば一秩序は反秩序があって規定される。そして秩序・反秩序の上に立って、そもそも何が秩序で反秩序なのかの価値基準を決めるのが主権者＝権力。反秩序の否定をもって社会を秩序づけるのが権力⁴³。この権力は具体的人格として現象するが、【Ⅱ】の議論に沿えば、他者化した権力である。

これはリベラリズムの法秩序思想の欺瞞性を突いた批判。しかし、他者化した権力を、労働する諸個人の意志として自覚的に取り戻すという方向で議論しているのではない。欺瞞

⁴¹ 上でも述べたが、マルクス主義＝スターリン主義ではないが、マルクス主義の理論的な欠陥を土台の上に、それを実践的に貫徹するとスターリン主義が発生するという関係にある。

⁴² [1888～1985]ドイツの政治学者。ナチス党员も。

⁴³ こうして見ると分かるように、シュミットの〈敵-友〉論、〈例外-常態〉論は、ヘーゲル弁証法の援用である。〈決断者＝理性〉ということである。

の仮面を剥いで、あからさまに特定の権力者に諸個人の力を集中させることで、近代の欺瞞を露見させる、ということを主張した。だから、シュミットの主張はナチスの実践を支えるものともなった。

このように、近代の法秩序のダークサイトを右から暴いたのがシュミットであるとするれば、同じ趣旨を左の側から突き出したのがレーニンのプロ独論といえる。どちらも法秩序のダークサイトに権力の本質を見ている。同時にどちらも近代の限界を究極的に突き詰めたが、しかし、それを越える思想ではなかった。

プロ独国家とは、そういう意味で、プロレタリアを冠しているが、近代国家の究極の姿であり、止揚すべき他者に他ならない。赤色テロリズムとプロレタリア独裁の政治思想的背景は同根である。法秩序の中立性や普遍性を装うリベラリズムの思想に対して、革命という拘束のない大義に基づいて暴力をもって意志を強制する思想、近代のダークサイトを開示した思想。人間解放の思想ではない。痛苦に確認する必要がある。

●拘束的委任制

プロ独のように光は当たらなかったが、その対照をなすものとして、拘束的委任制という考え方がある。

1848年革命時の共産主義者同盟、チャーチスト運動、国際労働者協会、パリ・コミューンなどにおいて採用された拘束的委任制。諸個人（選挙者）が派遣委員を選出、その派遣委員が、選挙者に対する拘束的委任の受任者として、選挙者の指示に服する。コミューンの編成原則。

拘束委任制では、選挙者の決定に対して派遣委員が背いたり、履行しなかったりすれば、解任される。そういう形で、各級のコミューンから中央まで、拘束的に委任された派遣委員によって下から厳しく統制される。同時に諸個人の自覚と責任が問われる。その下で、要求・規範・目標・政策などが決定され執行される。レーニンの言う超法規超規範とは真逆で、どんな議会制民主主義よりも、厳しく諸個人に拘束される権力ならざる権力、中央ならざる中央。こうして、他者化した権力を、労働する諸個人の意志として自覚的に取り戻し、国家に吸収されていた自らの力を、コミューンの下に再吸収していく。

◇近代国家の代表制

近代国家の編成原則は代表制。「国民主権」を謳いつつ、議員に代表委任（白紙委任）する。議員は選挙者の拘束を受けない。議員は選挙者を代意代行し、他者化した意志を発現する。拘束委任制とは対照的である。

レーニンの考えは、議会制は廃棄だが、代表制は保持であった。ソヴィエトで代表制が定着し、代意と代行が蔓延した。⁴⁴

⁴⁴ 【IV】の冒頭で示唆したが、なぜ拘束的委任制に光が当たってこなかったのか。エンゲルスは、過渡期の国家について、『反デューリング論』で、近代国家と同じ代表制で論じた。レーニンも同じく代表

◇直接制と拘束的委任制

あくまでも直接制ではないのか、という疑問があるだろう。たしかに拘束的委任制はその限り間接制である。そして、ルソーは、代表制を批判して直接制を唱え、直接制が不可能な場合として拘束的委任制の採用を説いた。

しかし規模と距離の問題を考慮せずに直接制を採用する場合、〈各級のコミュニケーションから中央まで、拘束的に委任された派遣委員によって下から厳しく統制される。同時に諸個人の自覚と責任が問われる〉という厳しさがなく、他者任せと代行代意が発生する余地があるのではないだろうか。

その上でいうまでもなく、日常的恒常的な現場の決定と実践は全員参加の直接制だ。

したがって、現実的には、直接制と拘束的委任制とをどう組み合わせるかになるだろう。

◇今こそ真の民主主義を

議会制民主主義は結局、上で見た代表制。一般に民主主義という場合、代表制しか経験していない。しかし代表制と民主主義とは実に対立があり、代表制である限り民主主義は形式に留まり、実質は奪われて行く。だから代表制民主主義にたいする不信が広まり差し当たり右からの圧力で空洞化・崩壊の過程にある。

それに対する立場は代表制民主主義の防衛ではない。

拘束的委任制を真の民主主義として対置していく必要がある。グローバリズムの進展と代表制民主主義の空洞化の中で、拘束的委任制が、アソシエーションとともにアクチュアルな要求になりうる。

【V】 国家の再吸収

●国家の解体と政治革命

⑧「人間が自分の『固有の力』を社会的な力として認識し組織し、したがって社会的な力をもはや政治的な力の形で自分から切りはなさないときにはじめて、そのときにはじめて、人間的解放は完成されたことになる」(『ユダヤ人問題』)

⑨「コミュニケーション—それは、国家権力が、社会を支配し圧服する力としてではなく、社会自身の生きた力として、社会によって、人民大衆自身によって再吸収されたものであり、この人民大衆は、自分たちを抑圧する組織された強力に代わって、彼ら自身の強力を形成するのである」(『内乱』第一草稿)

制。さらに翻訳問題がある。本来、代表制の議員は representative、拘束的委任制の下での派遣委員は delegate と、概念・用語とも区別されているのに、日本におけるマルクス主義の翻訳では、representative も delegate も同じく「代表」とされてきた。

㊸「国家を社会の上部にある機関から社会に完全に従属する機関に変える」（『ゴータ綱領批判』）

◇私的所有からアソシエイト諸個人へ

資本主義の編成原理は私的所有。私的所有とは、労働する諸個人の力（意識性能動性社会性）を全部、自己に対立的に他者化してしまったということ。労働する諸個人は、単なる私的諸個人と化し、社会の編成に関する一切を他者任せにするしかない。他者とは商品、貨幣、資本、国家、法則その他。

人間の解放とは、資本や国家として他者化した力を、自身の力として認識し組織し取り戻し、諸個人自身が社会の編成原理となること（㊸）。誤解なきように強調すれば、アソシエーションが編成原理ではなく、**アソシエイトした諸個人**が編成主体となってアソシエーションを組織する。アソシエイトした諸個人の意識性能動性社会性が一切である。

かつて**共同体**が社会編成の中心にあり、労働する諸個人は人格としては共同体に依存・埋没していた。資本主義においては、**私的所有**が主体化して社会編成の中心となり、労働する諸個人は人格としては抽象的に自由になったが、社会編成は全面的に物象に依存する。アソシエーションにおいては、**アソシエイトした諸個人**が、意識的能動的社会的な主体となって社会を編成し、人格的にも真の自由を獲得し全面的に発展する。

◇社会革命

アソシエーションは、新たな社会に移行して初めて作り出さるものではない。資本主義の下で、転倒形態で潜在的に形成されている社会的生産を、顕在化させたものがアソシエーション。そこに至る実践が社会革命である。革命の総括軸は社会革命にある。

社会革命は、新旧の政治・経済・社会・文化のシステム間の長期にわたる競合・抗争・消長による変革過程である。

そして、資本主義が生み出した自由な人格を起点に、搾取や貧困によって労働する諸個人の自由な人格が否定され、この否定を通して諸個人が意識的自覚的な主体として陶冶され、アソシエイトされていく。

資本の社会システムの自己矛盾的展開の中で、客体（社会的生産）と、主体（労働する諸個人）の分裂を止揚していくのであり、それを止揚する主体＝アソシエイトした諸個人が形成されていく。

◇政治革命

社会革命の前進の中でその結節環として政治革命がある。幾多の政権交代、政治制度の再編を経ながら、社会の上部にある国家権力を、社会に従属する機関に引き下ろし、その機能を社会に吸収し、コミューンを生み出していく変革である。

政治革命＝国家の解体は、粉碎でも打倒でもない。アソシエイトした諸個人という、その力を他者化しない編成原理を産み出す社会運動にしか国家の解体はできない。その運動の結節環がコミューン。それは他者化としての権力とは原理的に違う。そのカギは拘束的委任制にある。

政治的国家は、諸個人の力を吸収し、それを公的な力として他者化して、諸個人を抑圧している。コミュニオンにおいては、国家が他者化していた力を、アソシエイトとした諸個人の下に再吸収し、諸個人自身の力として発揮するのである (㉔)。国家が吸収していた諸機能も、アソシエイトした諸個人が編成原理となり、アソシエイト諸個人に従属する機能にする (㉕)。

◇新しい社会

アソシエーションとは〈労働する諸個人が互いに主体的能動的意識的に結びついた協同組織〉。

アソシエーションは、アソシエイトした諸個人が、自ら生産を管理し、生産手段を所有し、協同労働に従事する社会的生産のシステム。同時に、多種多様な協同組織・地域組織・自治組織などが、重層的に分節しつつ縦横に連合する政治的社会的なシステム。しかもグローバルな交通と依存によって結合したシステムである。

資本主義にかわる新しい社会はアソシエーションである。(了)

参考文献

【I】

浅見克彦 「所有」『マルクス・カテゴリー事典』

有井行夫 『株式会社の正当性と所有理論』

“ 『マルクスはいかに考えたか』

【IV】

大藪龍介 『国家と民主主義』

同 「代表制と派遣制」『マルクス・カテゴリー事典』

仲正昌樹 『カール・シュミット入門講義』

【II】

大谷禎之介 『図解 社会経済学』

『マルクスのアソシエーション論』

大藪龍介・他 『アソシエーション革命へ』

田畑稔 『マルクスとアソシエーション』

【III】

アガンベン 『例外状態』

有井行夫・編 『現代認識とヘーゲル＝マルクス』

“ 『マルクスはいかに考えたか』

大藪龍介 『近代国家の起源と構造』

境毅 『Alternative Systems Study Bulletin』第22巻6号

柴田高好 『マルクス政治学原論』

田畑稔 『マルクスと哲学』

パシュカーニス『法の一般理論とマルクス主義』